

シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ③〕

～デカルトの独自の用法とその認識論～

村 上 吉 男

シモーヌ・ヴェーユは学士論文『デカルトにおける科学と知覚』の第二部で、(新しいデカルト)としての認識論を、筆者をして名付けられる、デカルトが「真のねらい」とした「もう一つの真理の探求」の認識論を描出しようとした。「もう一つの真理の探求」の認識論は、身体の〈sens (感覚)〉や精神 (esprit) の〈sentiment (感覚)〉を例にしてみると、このそれぞれに、筆者の提起する彼「独自の理性」(既出引用文㊦中の〈思惟〉)が働きかけて成り立っていた。ところが彼女は「もう一つの真理の探求」の認識論を第二部で語るはむろんのこと、同時にその〈sens〉や〈sentiment〉(彼女では各能力を、また両能力をさしている〈sensation(s)〉)以外に、〈sensibilité (感受性)〉を導入させて、〈感受性〉を基軸にする認識論をもかさねあわせて論じていた。そこでは〈感受性〉を中心にしての認識論が、既出引用文㊦㊧でいう〈デカルトラしき巧みな企てをまね〉た、それこそ彼女の「巧妙」さで構成されるにしても、また〈新しいデカルト〉の認識論を打ち出さねばならぬ関係で、前面に押し出されるまでにいたらずとも、自らの認識論的思想を、若干21歳でものした学士論文に刻んだことは、筆者にとって驚きであり、認識論的思想をはじめとする、数数の思想をまとめ切れずに、34歳の短かすぎる生涯で逝ったことは、彼女本人でなくとも惜しまれてならないというほかないのである(わたしたちはそのすべてを整理し仕上げおく必要がある)。

とまれ、シモーヌ・ヴェーユはデカルトのいう〈sens〉、〈sentiment (筆者のいう「能動的 sentiment」)〉やもう一つの〈sentiment (筆者のいう「受動的 sentiment」)〉のほか、〈sensibilité (感受性)〉や〈sensibilité passive (受動的感受性)〉を取り入れたが、そこにはしかし、両者の「認識の起こり」としての各能力が映し出されているとおかねばならない。「認識の起こり」とは〈外来的な何か (外来的な事物)〉に対応する能力にかかわるし、この能力は何を措い

ても、彼では身体の〈sens〉であり、彼女では身体の〈sensibilité〉である。これこそ既出引用文①や①で明かされるが、彼女では「認識の起こり」の能力、たとえば上記〈sens〉、「能動的」〈sentiment〉や「受動的」〈sentiment〉たる〈sensation (s)〉（他に身体や精神の各〈imagination〉があることは次回以降に譲る）が〈何ものでもない〉と捉えられるがゆえに、〈外来的な事物〉に対して、これらの「感覚」だけでない受容を可能にする、かつ「何もの」か（〈量的である〉こと）になる〈感受性〉が持ち出されねばならなかった（「感覚」だけでない）は「感覚」の受容を否定せずとも、「感覚」を上記の理由にて問題にしないことをさす）。それでここでは、「感覚」の語と同様に、「認識の起こり」の誘因となる、本稿以下でいう〈ressentir〉や〈sentir〉を織り込んで成立するのが〈感受性〉の語に該当するとみておく必要がある。

〈感受性〉を考慮せぬときは、デカルトのいう「感覚」は〈日常的用法〉の認識論での「認識の起こり」の能力として語られるであろう。しかも学士論文第一部の最後（既出引用文⑥⑦（の前半部分））に暗示されるにすぎない〈日常的用法〉の認識論はその第二部において、彼女が「もう一つの真理の探求」の認識論を言及するなかで、ふんだんに記されることになる。それゆえ学士論文は第一部に〈真理の探求〉の、第二部に〈日常的用法〉の、そして〈日常的用法〉を組み込ませて新たに成る「もう一つの真理の探求」（という三つの用法）の各認識論を「巧妙」に配置する、見事な構成であるとしかいかえ、筆者はこれさえも「驚き」と表現するほかないのである。

ここでその一用法たる〈日常的用法〉の認識論での「認識の起こり」の能力について振り返ってみよう。デカルトでは、身体の〈sens（感覚）〉は、精神（*âme* なる〈腺H〉や〈脳本体〉の順）に伝わっても、依然〈sens〉のまま（既出引用文⑥⑦にいう）〈表象〉し続けるよう〈運動〉するとき、また身体の〈sens〉が〈腺H〉に受け入れられるや、そこに〈脳本体（*âme raisonnable*（理性的精神））〉からの能力〈sentir（感じる）〉の働きかけ（運動）を受けて、〈sentiment（感覚）〉として〈表象〉するとき、そしてこの〈sentiment〉が〈腺H〉で〈表象〉できずに、さらに〈運動〉を続けては、〈脳本体〉に受け入れられ、〈脳本体〉内でこの〈理性的精神〉の一能力〈vouloir（意志する）〉（これをデカルトの引用文の提示に基づいて証明するは次号以降に譲る）の働きかけ（運動）を受けて、前記した「もう一つの〈sentiment〉すなわち彼のいう〈passion〉とし

て〈表象〉するときがあった。筆者は筆者で、前者の〈sentiment〉を、〈sentir〉の「能動的」〈運動〉で〈表象〉するがゆえの「能動的 sentiment」⁽¹⁴³⁾と、後者の「もう一つの〈sentiment〉」を、〈se rapporter à l'âme même（精神（腺Hと脳本体）そのものと関係）〉⁽¹⁴⁴⁾があり、〈精神（脳本体）〉からみてその〈受動〉の〈表象〉となるがゆえの「受動的 sentiment (passion)」⁽¹⁴⁵⁾と表記した。

また筆者は繰り返しになるが、前段中の身体の〈sens（感覚）〉と「能動的 sentiment（感覚）」にそれぞれ〈sensibilité（感受性）〉を、さらに「受動的 sentiment (passion)」に〈sensibilité passive（受動的感受性）〉を並列させ得ると記した。むろん両者は〈感覚〉や〈passion〉が〈質的〉で、〈感受性〉や〈受動的感受性〉が〈量的〉であることで相違せざるを得ないために、等しい能力同士というわけにはいかない。だからたとえば〈passion〉が即〈受動的感受性〉であるとはいえない。それはデカルトのいう〈passion〉は〈感覚〉であるが、シモーヌ・ヴェーユのいう〈受動的感受性〉は〈感覚〉でないからである（この点は次号以降に彼女の引用文を提示して証明される）。また彼にいう、〈腺H〉や〈脳本体〉なる各精神（âme）ではじめて〈表象〉しよう、それぞれの〈sentiment〉や「もう一つの〈sentiment (passion)〉」は各「認識の起こり」としての能力になろうし、さらに彼女にいう、「能動的 sentiment」や「受動的 sentiment (passion)」に並置される、おのおのの〈感受性〉や〈受動的感受性〉も上記と同様、各「認識の起こり」の能力となるにちがいなからう。

しかしシモーヌ・ヴェーユの学士論文第二部で、〈感受性〉、〈受動的感受性〉やデカルトのいう諸〈感覚〉を表記する際に必要であろう、筆者が彼にみた〈脳〉の〈腺H〉や〈脳本体〉たる部位のことを、彼女は一切使用することがなかったのも事実なのである。すると筆者が、彼のいう諸〈感覚〉が生じる上記した「部位」に、〈感受性〉や〈受動的感受性〉をかかわらせると断じたことは、誤まりか。否。彼女は彼の諸〈感覚〉に関する用語、たとえば〈sentir〉を利用し、これと彼女の用語〈運動〉をもって、各「部位」の表現の代わりとなし、かつ〈sentir〉を筆者のいう「閾値」にすら宛がうよう打ち出すと推察されるからである。以下の数段落で、その証明が試みられるであろう。

学士論文の第二部には〈精神（esprit）〉の語が多く散見されたことで、そこに記される、たとえば〈sens〉、〈sentiment〉や〈passion〉なる諸〈感覚〉は、デカルトにあっても、〈日常的用法〉の〈精神（âme）〉のでなくして、「もう一

「真理の探求」の〈精神 (esprit)〉の各能力として捉えられるほかないのだから、〈日常的用法〉の〈âme (腺Hや脳本体)〉を明かすにとどまるなかで語られてはならないし、ことがシモーヌ・ヴェーユ本人にあって、端から〈腺H〉や〈脳本体〉の〈脳 (脳はまた紛れもなく身体でもある)〉の「部位」の、まして身体 (諸器官) の「部位」の各語さえ第二部に示さぬ以上、およそ〈腺H〉や〈脳本体〉を〈精神 (âme)〉とする見方はないばかりか、筆者が仮りにあると想定してみても、これらはすでに〈esprit〉に融合されていよう身体なのであり、この身体は〈esprit〉と不可分であるが、それでも身体なくせば、〈esprit〉が成り立たないほどであると、したがって身体は彼のように、〈esprit〉や〈âme〉という精神を優位に立たせたうえで質される、彼の思想を逆転せしめるといわなければならないのである。

〈腺H〉や〈脳本体〉の各「部位」を代用させる用語は、当のデカルトにあっては、各「部位」に働きかけ (運動し) て、〈sentiment〉や〈passion〉の諸〈感覚〉を各〈表象〉する〈sentir〉や〈vouloir〉である。〈sentir〉や〈vouloir〉はもともと〈日常的用法〉の〈精神 (âme)〉の諸能力であるが、第二部における「もう一つの真理の探求」を描く、彼やシモーヌ・ヴェーユの意図のもとでは、むしろ〈精神 (esprit)〉の諸能力として用いられるし、それぞれが〈sentiment〉や〈passion〉たる各〈表象〉の「認識の起こり」の因となる。彼女は彼のいうこれらの〈感覚〉と、これらを〈表象〉する〈esprit〉の上記した諸能力を踏襲するだけでなく、さらに例の〈sensibilité (感受性)〉や〈sensibilité passive (受動的感受性)〉の〈表象〉に際してもこの諸能力を当てはめる。ただし彼女は、〈受動的感受性〉の〈表象〉の「認識の起こり」の因となる能力に対して、〈passion〉を〈表象〉するときに働きかける〈vouloir〉に代え、〈éprouver〉を使用する。なぜなら〈passion〉はあくまで〈感覚〉とみられるのであり、感覚ではない〈受動的感受性〉の〈表象〉には、〈vouloir〉の〈運動〉を該当させるはふさわしくないように思われるからである。

だからシモーヌ・ヴェーユの場合、〈sentir〉や〈vouloir〉または〈éprouver〉の、〈精神 (esprit)〉での働きかけ (運動) において、〈sentir〉が〈sentiment〉や〈sensibilité〉を、〈vouloir〉が〈passion〉を、〈éprouver〉が〈sensibilité passive〉を〈esprit〉でときに〈表象〉しよう各能力になる。彼女にとって、〈腺H〉や〈脳本体〉あるいは身体 (諸器官) の各「部位」なる名称を表記せずとも、こう

した〈sentir〉や〈vouloir〉または〈éprouver〉という〈esprit〉の諸能力が用意されるからこそ、諸能力は同一の〈esprit〉での働きかけにおいて、〈変化〉して〈質的〉となる〈sentiment〉や〈passion〉に、〈量的〉なままでの〈sensibilité〉や〈sensibilité passive〉の各〈表象〉に区別させるし、かつ〈sentiment（感覚）〉や〈sensibilité（感受性）〉に共通して起用される〈sentir〉だからこそ、〈sentir〉自体にも〈質的〉や〈量的〉に働く区別が必要であり、たとえば〈量的〉に働く〈sentir〉によって、その〈感受性〉は彼女の語る認識論（認識の起り）では、〈感覚〉と並立（並置）させられることだけでなく、彼女が〈感受性〉を前面に出そうと主張するかぎり、〈感覚〉と取って代わり得る、彼女の認識論を代表させずにおかない能力とみなされるわけである（〈passion（情念）〉や〈sensibilité passive（受動的感受性）〉における〈vouloir〉や〈éprouver〉はこの用語の相違にて、各〈表象〉の区別を当初より明確にさせる）。

さらに〈esprit〉の上記の諸能力の各働きかけ（運動）自体が筆者のみる、前号での「〈運動〉中の〈運動〉」という「閾値」に相当する（傍点は「閾値」としての〈運動（量）〉である）と同時に、諸能力はそれぞれ、もし〈外来的な事物〉が身体の〈sens〉や〈sensibilité〉になる〈運動（量）〉を身体（諸器官）でなしに、この身体の各能力（後述）を〈esprit〉に伝えられなければ（伝えるのも〈運動〉であるが、この〈運動〉は前記の「〈運動〉中」という〈運動（量）〉をさす）、もとより〈esprit〉での〈sentiment〉と〈passion〉の諸〈感覚〉や〈感受性〉と〈受動的感受性〉の各〈表象〉をもたらず、「閾値」としての各〈運動〉（働きかけ）を不可能にさせるし、この各〈運動〉によってはじめて区別させられよう〈質的である〉諸〈感覚〉や〈量的である〉〈感受性〉と〈受動的感受性〉（後者は次号以降検討）も見出せなくさせるにちがいない。

シモーヌ・ヴェーユは、諸能力中の〈éprouver〉を自らの用語とみなす一方で、たとえば〈imaginer〉、〈concevoir〉や〈affirmer〉などのほかのすべてを、デカルトの諸用語から借りるばかりか、繰返すが、この〈esprit〉でのあらゆる能力を、彼のいう〈精神（âmeやesprit）〉の〈腺H〉や〈脳本体〉にではなく、各「部位」をもちあわせない〈esprit〉自体にかかわらせるだけであり、しかも筆者のみる「閾値（量）」たる〈運動〉（働きかけ）として捉える。〈sentir〉を例にし再びいうと、その働きかけで〈esprit〉に〈表象〉する〈sensibilité（感受性）〉は、〈sentir〉をして「閾値」の役割たらしめる「量（値）」たる〈運動〉

そのものであり、何より〈運動というもの自体〉に沿って〈表象〉するが、しかし〈sentiment (感覚)〉は、〈sentir〉なる「閾値」によって、〈運動の変化〉に出くわさざるを得ず、〈運動の変化は質的である〉に相当する以外にない能力となって〈表象〉したのである。〈感覚〉が〈質的である〉とみるは、かのアリストテレスが〈感覚は一種の質的变化である〉⁽⁴⁶⁾と述べたことと同様になろう。

そこで、シモーヌ・ヴェーユが〈esprit〉をその〈腺H〉や〈脳本体〉の各名称であらわし説くのではなく⁽⁴⁷⁾、筆者が〈sentir〉などの、〈量的である〉働きかけ(運動)(この〈運動〉は筆者のいう「閾値」をさす)を有する〈esprit〉に代表させると断じるにしろ、たとえば〈sentir〉でもって〈表象〉しよう(〈sentiment (感覚)〉や〈sensibilité (感受性)〉はそれぞれ学士論文第二部にて、上記したことを窺わせるのか確かめておかずばなるまい。この例にはまさしく、既出引用文①で〈sentir〉の書き込まれる〈je sens plaisir ou peine (わたしは喜びや苦しみを感ずる)〉という文章が相当すると察知される。この文章での〈sens〉の不定形〈sentir (感ずる)〉は〈esprit〉の諸能力の一である。だから〈plaisir (喜び) ou peine (苦しみ)〉はおのおの〈感ずる〉ことで、すなわちこの「閾値」たる〈運動(働きかけ)〉で、〈esprit〉に〈表象〉する、〈esprit〉としての新たな能力(〈喜びや苦しみ〉たる〈感覚〉や〈感受性〉)となる。だから〈je (わたしは)〉は〈esprit〉に見立てられてかまわぬのである。

以上から、その新たな能力〈喜びや苦しみ〉は当然、〈esprit〉の〈感覚〉のそれぞれとして受け取られようが、しかし筆者は新たな能力をば、〈esprit〉の〈sentiment (感覚)〉だけでなしに、〈esprit〉の〈sensibilité (感受性)〉としても受け取り、シモーヌ・ヴェーユの言に従わせていえば、〈感受性〉を〈感覚〉と交換(入れ換え)させ得るのである。なぜなら筆者は既出引用文①(わけても〈喜びや苦しみ〉)に、デカルトのいう「もう一つの真理の探求」の用法での〈感覚〉と捉えられる解釈と並行させて、〈感受性〉を中核とした、彼女独自の認識論(の展開)を盛り込ませていると読むことができたからである。

むろん拙論はデカルトの認識論の究明にあるから、シモーヌ・ヴェーユ独自の認識論の全貌に言及するところではないにせよ、それでも〈sentir〉ならびに〈éprouver〉が筆者において、彼女の持説として取り上げられたといえる〈sensibilité (感受性)〉や〈sensibilité passive (受動的感受性)〉にかかわらないとみなされては、彼女がなぜ、学士論文に続く『哲学講義』中の既出引用文①

で〈わたしたちにもたらされるものがたんに感覚だけでない〉と、またその①で〈運動というものの自体は量的である〉と語ったのか、あわせて筆者が〈量的である〉〈運動〉に関し、ときにこの〈sentir〉(や〈éprouver〉)をなぜ「閾値」に捉えるのか判明さえしないのである。

シモーヌ・ヴェーユが〈sensibilité (感受性)〉(のあること)を証明させる場合、たとえば〈感受性〉の〈表象〉のための〈sentir〉が〈運動〉(「閾値」)の役割を担うと指摘できるがゆえに、〈sentir〉は、デカルトが〈脳〉の「部位」(腺H)に関係させ問う、〈sentiment (感覚)〉用の〈sentir〉とは相違せねばならなくなる、とどのつまり〈たんに感覚だけでない〉とする彼女の主張にとっては、〈感覚〉に対する〈sentir〉はむしろのこと、〈sentir〉が〈感受性〉という、別の新たな能力用に用いられなければならない。かつ〈感覚〉や〈感受性〉に〈sentir〉を併用させるにしても、〈sentir〉にその〈運動〉(「閾値」)を充当せしめる以外、彼女は〈sentir〉が斯うだと語ってはくれない。しかも〈運動というものの自体は量的である〉と断じる〈量(的)〉を、ときに〈運動〉(「閾値」)の役目を果たす〈sentir〉に当てはめずに、この〈sentir〉は〈感受性〉にあって、〈運動〉が〈変化〉して、〈質的である〉〈感覚〉を〈表象〉させる際の「閾値」との区別をどうしてつけさすことができようか。筆者が先きに「〈運動〉中の〈運動〉」と記したとき、前者の語〈運動〉を上記の〈運動というものの自体〉と捉えれば、後者の語〈運動〉は「閾値」に相当する〈運動〉になろうし、後者の考えがここに導入されてはじめて、〈感覚〉や〈感受性〉それぞれに〈質(的)〉や〈量(的)〉としてかわる〈sentir〉たる〈運動〉(「閾値」)の区別がつけられるということである。

それゆえシモーヌ・ヴェーユ独自の認識論には〈たんに感覚だけでない〉、〈量的である〉能力があると指摘でき、これは〈sensibilité (感受性)〉であると認められるがゆえに、既出引用文⑥中の〈喜びや苦しみ〉はおのおの、〈esprit〉の新たな能力としての、〈sentiment (感覚)〉にも〈感受性〉にも与すると結語せざるを得なくなる。それでも彼女独自の認識論では、彼女が〈何ものでもない〉という、いわば無益な〈感覚〉よりか、〈感受性〉を優先させるはいうまでもなかろう。と同時に〈感受性〉は彼女がデカルトの「もう一つの真理の探求」にあわせて自らの認識論に持ち込まれるが、しかし彼女がこの用法を丸ごと支持していたとみえぬども、これをして〈精神〉を〈âme〉でなしに、〈esprit〉た

らしめ、その〈esprit〉の新たな能力たる〈感受性〉にとっては、前記し、さらに後述する通り、〈esprit〉の〈sentiment〉に対する身体の〈sens〉の関係と同じように、身体の能力〈sensibilité (感受性)〉を因にせずにおれない以上、〈esprit〉や身体の〈感受性〉を中心にする、彼女独自の認識論は他面で少なからず、彼の「もう一つの真理の探求」を踏まえて成立させるほかならうといわねばなるまい。

またここに蛇足となるやも知れぬことが以下三段落に亘り記される。それは、学士論文中の〈sentir〉はもとより、デカルトの認識論的思想を明かすうえで用いられたにせよ、これに続く『哲学講義』では、〈sentir〉よりも、先に触れた〈réflexe (反射)〉の語が多く散見するからして、〈反射〉は〈sentir〉に取って代わられたのではないかという疑問にある。まずしかりと答えおく。〈反射〉は〈réflexes congénitaux (先天的反射)〉⁽¹⁴⁸⁾ すなわち無条件反射であれ、〈réflexes acquis (後天的反射)〉⁽¹⁴⁹⁾ すなわち経験 (学習) により生じる条件反射であれ、シモーヌ・ヴェーユの既出引用文⑤の語句でいう〈喜びや苦しみ〉、〈外来的な何か〉や〈外来的な事物〉が身体内外の受容器 (感覚諸器官) を〈excitation (刺激)〉する際、〈esprit (もっぱら〈意志する〉能力) の統御に無関係ではあるが、〈神経〉を通して効果器 (彼女では〈esprit〉中の反射中枢、また彼では〈腺H) に反応を示す現象であるとされるし、人間 (動物) の身体を〈自動機械〉と断じた彼にも、〈自動機械〉が動くとする、〈反射〉が予想されねばならず、彼はこうした現象に注意していたにちがいない。しかれども彼は自らの認識論を〈刺激〉や〈反射〉の思想で開陳したのでないことは、これまでに述べてきた通りである。

一方、〈MÉTHODE EN PSYCHOLOGIE (心理学における方法)〉⁽¹⁵⁰⁾ や 〈ÉTUDE DU CORPS : LE RÉFLEXE (身体の考察: 反射)〉⁽¹⁵¹⁾ なる諸見出しを第一部に掲げる『哲学講義』はこれがために、当時〈心理学〉が哲学から独立していた⁽¹⁵²⁾ とはいえ、シモーヌ・ヴェーユにとって、〈心理学〉は哲学の一分野として、換言すると〈刺激〉や〈反射〉は筆者のみる生理学 (「閾値」の思想) だけでなく、哲学 (心理学) として捉えられるが、それでもとりわけて「閾値 (量または強さ⁽¹⁵³⁾)」そのものに充当しようと指摘し得る〈反射〉と、筆者には学士論文で、彼女がデカルトに訣別を宣言し (見切りをつけ) たと思われる⁽¹⁵⁴⁾、そのなかでの語〈sentir〉とが同意であると受け止められなければ、『哲学講義』に

おける、〈運動〉を記す既出引用文①とこの〈反射〉を整合させることができないどころか、学士論文以来の彼女独自の認識論さえ一貫した思想になり得ぬであろう。だがそんなことはない。彼女にあっては、生徒たちに教え授ける〈刺激〉や、この〈刺激〉（運動）での「閾値」（量または強さ）すなわち〈反射〉と、たとえば〈外来的な事物〉や、この受容器から〈神経〉を通る〈外来的な事物〉に対し〈esprit（反射中枢）〉で、働きかける（運動する）とみた〈sentir〉すなわちその「閾値」とは同じでなければならぬわけである。だから『哲学講義』では〈esprit〉での〈感受性〉をはじめとする新たな諸能力たる〈表象〉は、こうした〈刺激〉や〈反射〉の思想において説かれることが可能になるといえる。

〈esprit〉における新たな諸能力たる〈表象〉を〈刺激〉と〈反射〉でいい直すならば、〈esprit〉上の〈刺激〉は身体の〈sens（感覚）〉や〈sensibilité（感受性）〉であり、それぞれが〈反射〉するときに、前者が〈sentiment（感覚）〉、後者が〈sensibilité（感受性）〉という〈esprit〉としての新たな各能力たる〈表象〉が誕生することになろう。だが〈反射〉しなければ、それは身体の上記各能力が「閾値」を超えないことを示すから、身体の各能力は〈esprit〉で、また〈esprit〉以降で、身体の各能力のまま〈運動（反応）〉し続けるであろう。しかしこのとき、人は「身体の各能力のまま〈運動（反応）〉し続ける」と書いたことを不思議に感じるにちがいない。それには後述もするが、次のように答えおくしかない。たとえば〈外来的な事物〉としての身体の〈感覚〉は身体（の内外諸器官）で、註(151)の〈身体の考察：反射〉の通り、すでに〈反射〉したからこそ、身体の〈sens〉なる能力であり、もとより〈外来的な事物〉はその受容器に、それ自身を通らせるのでなしに、〈sens〉を〈表象〉させる〈刺激〉と〈反射〉になるほかない。この〈sens〉が伝わろう〈esprit〉の方からみると、それでも身体の〈sens〉は〈esprit〉にとって〈刺激〉にしかならないのである。だから〈反射〉しない「とき」、身体の〈反射〉たる〈sens〉のまま〈esprit〉やそれ「以降」でも「〈運動（反応）〉し続ける」と記すことが、あるいは〈esprit〉内で、身体の〈sens〉はときに消滅すると追記することが可能となる。

ただ身体の〈感覚〉や〈感受性〉が〈esprit〉でその〈感覚〉や〈感受性〉としてそれぞれ〈反射〉すると断じるときでも、おのおのが〈sentir〉が〈運動〉する際にではなく、換言すると〈sentir〉が「閾値」に達したという〈反射〉の

際にはなく、身体に〈刺激〉され〈反射〉した時点の当初から、〈感覚〉は〈質的〉と、〈感受性〉は〈量的〉とみなすことが肝要であり、このことは〈反射〉せず、身体の〈感覚〉や〈感受性〉のまま「〈esprit〉やそれ「以降」でも〈運動（反応）〉し続ける」各能力にあっても同様なのである。なぜなら、たとえば〈質的〉とされる〈感覚〉の〈運動の変化〉は〈esprit〉にばかりでなく、身体（の内外諸器官）にこそ生じはじまるとみておかねばならないからである。さらにデカルトにいう身体の〈sens（感覚）〉や〈esprit〉の〈sentiment（感覚）〉の、シモーヌ・ヴェーユにいう身体の〈sens（sensation）〉や〈感受性〉と〈esprit〉の〈sentiment（sensation）〉や〈感受性〉の各〈表象〉が、〈反射〉したうえでの各それでしかないことはいうまでもない。

それはともかく、既出引用文⑤中の、〈喜びや苦しみ〉、〈外来的な何か〉や〈外来的な事物〉は、〈精神（esprit）〉の能力〈sentir〉たる〈運動〉において、デカルトに当てはめては、〈esprit〉の〈sentiment（感覚）〉（筆者のいう「能動的 sentiment」）に、シモーヌ・ヴェーユでは、〈esprit〉の〈sentiment（sensation）〉や〈sensibilité（感受性）〉に捉えられるのであった。学士論文第二部での〈esprit〉のいい換えを「部位」の用語で表現しない彼女からすると、これも繰返しになるが、上記の〈喜びや苦しみ〉、〈外来的な何か〉や〈外来的な事物〉が〈esprit〉でいかに〈表象〉し得るかは、こうした各対象に〈sentir〉という、「閾値」（量または強さ）となる〈運動〉が働きかける場合にかぎられるのであって、〈運動（「閾値」）〉を〈sentir〉に含意させずして、⑤の各対象すなわち身体の〈sens（sensation）〉や〈sensibilité〉と〈esprit〉の〈sentir〉の関係はおろか、〈esprit〉の〈sentir〉とその〈sentiment（sensation）〉や〈sensibilité〉の関係すら埋めることができないといっておかねばならない。

それでもシモーヌ・ヴェーユが記す〈喜びや苦しみ〉、〈外来的な何か〉や〈外来的な事物〉の人間への受容を、筆者は前記して、身体の〈sens（感覚）〉や〈sensibilité（感受性）〉なる諸能力にみると指摘したのに反し⁽¹⁵⁵⁾、彼女はこの諸能力のあることを明記せず⁽¹⁵⁶⁾、たとえば〈わたしは喜びや苦しみを感じる〉と語った傍点のごとき語句として（語句はまた⑤中の語〈対象〉に相当する）、これをあたかも最初から、〈esprit〉の〈sentir〉で〈感じる〉ことの〈対象〉に据える表現を試みるだけである。このとき、〈esprit〉こそ〈わたし〉でなければならぬからして、〈喜びや苦しみ〉たる〈対象〉を、身体がでなしに、

当然〈esprit (わたし)〉が〈感じる〉しかなくなるわけであり、しかもこうした〈対象〉は彼女に、〈sentir〉の働きかけ（運動）のおかげで、ほかでもない、〈esprit (わたし)〉が〈表象〉する「新たな諸能力」なる〈sentiment (sensation)〉や〈sensibilité〉となって理解されているように思われてならない。しかしながら、この〈sentir〉が中心に記されるにしても、ここは再度いうが、〈esprit〉にとっては、身体（諸器官）から伝えられる[・]身体[・]の〈喜びや苦しみ〉、〈外来的な何か〉や〈外来的な事物〉という各〈対象〉を、すなわち身体の〈感覚〉や〈感受性〉を受け入れる前提なしに、〈esprit〉の各〈対象〉は各〈表象〉を成り立たせしめない、またこれもすでにみた通り、各〈対象〉をかく名付けたり、判断したりするのは、〈esprit〉の理性（知性または悟性）なのであって、身体（諸器官）自体でも、その諸能力〈感覚〉や〈感受性〉でも、まして〈esprit〉の〈感覚〉や〈感受性〉でもない[・]と受け取っておく必要がある。

だから仮定の話での断言はできかねるが、しかしデカルトの場合、もし〈sentir〉が〈esprit〉における、身体の〈喜びや苦しみ〉、〈外来的な何か〉や〈外来的な事物〉たる各〈対象〉への働きかけでないと、とどのつまり身体の〈sens (sensation)〉への〈運動〉でないとするならば、シモーヌ・ヴェーユは学士論文第二部に、身体や〈esprit〉の各〈感覚〉以外、〈sentir〉をして何に働きかけさせるかを書き入れたりすることができるのであろうか。さらにもし各〈対象〉が身体（諸器官）にではなく、最初から〈esprit〉に受容されるとみるならば、第二部での「もう一つの真理の探求」という、彼女の洞察にあって、〈esprit〉の一能力〈sentir〉と身体の〈感覚〉との関係が見失なわれ、それぞれの役割が不明となるのではなかろうか（まさかはじめから〈esprit〉の〈感覚〉が〈esprit〉にあるとなし、この〈感覚〉に〈sentir〉が働きかけるのではあるまい。そもそも〈sentir〉が取り上げられる必要すらないのではないか。それに人がこの〈感覚〉に働きかけるといい続けたにしても、〈sentir〉は〈esprit〉での〈sentiment (sensation)〉を新たに〈表象〉させないどころか、身体の〈sens (sensation)〉を活用させる「もう一つの真理の探求」の認識論を打ち立てることができない）。さらにまたもし〈sentir〉が〈esprit〉ではなく、身体（諸器官）で働きかける身体的能力とみなされもするならば、デカルトも彼女も身体的能力である〈ressentir〉(次号)をどうして用いるのであろうか。彼らは〈ressentir〉を一方に用意するからこそ、〈sentir〉は身体的能力とはならず、〈esprit〉の能力でしか

なくなる（彼は〈sentir〉をもともと、〈日常的用法〉では〈理性的精神（*âme raisonnable*）たる〈脳本体〉の、〈真理の探求〉では実際に使用させなくとも、〈esprit〉の一能力として配置されるべく書き加えていた）。だが以上の仮定の話が現実になることはもはやないといわねばならない。彼において、真実は、〈sentir〉が〈esprit〉に伝わる身体の〈sens〉に働きかけて、〈esprit〉での〈sentiment〉を〈表象〉させるがゆえに、〈sentir〉こそ「もう一つの真理の探求」を導く〈esprit〉の能力でなければならぬのであって、〈sentir〉を除いては、彼にとってその用法の〈sentiment〉に充当される〈esprit〉のいかなる能力も見出せないし、それどころかこの用法すら実現させはしないということにある（学士論文第二部をこうした見方に添わせながら、それでも彼女がそこに〈感受性〉を打ち出し、後日の授業に語られた既出引用文①や②によって、そこから〈運動〉に身体や〈esprit〉の各〈感覚〉や各〈感受性〉を当てはめ、だからまた〈運動〉を〈sentir〉（筆者のいう「閾値」として捉えたであろうことは、彼の認識論を論ずる学士論文といえども、それにはすでに、彼女独自の認識論があったことを明かさずにいないのである）。

ここで〈sentir〉について、以下のことを振り返っておく。デカルトの〈日常的用法〉での〈sentir（感じる）〉は、身体の〈sens（感覚）〉が〈精神（*âme*）〉の一とされる〈腺H〉に伝えられたとき、これも〈*âme*〉の一とされる〈理性的精神（*âme raisonnable*）〉を居場所にするが、その身体の能力〈sens〉に対しては、〈脳本体〉から〈腺H〉にあたかも送信させられるように、〈腺H〉で働きかけ得る一能力であった（この〈sentir〉の働きかけなくば、身体の〈sens〉は〈sens〉のままで〈腺H〉を出、〈脳本体〉に、さらに「遠心的」に身体に伝わった）。そして身体の〈sens〉への〈sentir〉の働きかけにより、身体の〈sens〉が〈*âme*（腺H）〉で〈*âme*〉の〈sentiment（感覚）〉になった（〈sentir〉の働きかけ自身が能動であるがゆえに、この〈感覚〉は筆者のいう「能動的 sentiment」とみなされる）。だから学士論文第二部に織り込まれる「もう一つの真理の探求」は、その〈*âme*（腺H）〉でのことを、それでも彼も、またシモーヌ・ヴェーユもたんに〈esprit〉のことに移し変えた用法にすぎないといわねばならなくなる。なぜならことが彼にあっては、この用法が〈日常的用法〉における「部位」を同じく用いたり、「部位」（身体）を前面に出したりするようでは、この用法の「真理の探求」たる一面を損なうからであり、彼女にあっては、〈esprit〉が前記

の通り、〈sentir〉を〈腺H〉や〈脳本体〉にはなく、身体や〈esprit〉の〈運動〉（や「閾値」）だけにかかわらせるような試みがなされたし、あるいは第二部で、身体の〈sens〉や〈âme〉の〈sentiment〉に代えて、〈esprit〉用に〈sensation〉を用いるは、この語が「もう一つの真理の探求」の明記に役立つためにであったとみることができるからである⁽¹⁵⁷⁾。

筆者が〈日常的用法〉にも「もう一つの真理の探求」にも用いられるといい得る〈sentir〉は、【省察】でみると、たとえば〈熱さ〉（*je sens de la chaleur*）⁽¹⁵⁸⁾を、また〈苦しみ〉（*je sens de la douleur*）⁽¹⁵⁹⁾を〈感じる〉こととして表記される（だが〈真理の探求〉では各引用文は適用されない、つまり〈sentir〉はいかなる役割ももたせられない）。その〈熱さ〉や〈苦しみ〉はおのおの、〈日常的用法〉の〈âme〉で、同時に「もう一つの真理の探求」の〈esprit〉で、〈sentiments de plaisir et de douleur（喜びと苦しみの感覚）〉⁽¹⁶⁰⁾のような〈sentiment〉となる一方で、シモーヌ・ヴェーユにいう㊦の〈*je sens plaisir ou peine（わたしは喜びや苦しみを感ずる）*〉とは、〈感覚〉をあらわすデカルトの〈熱さ〉や〈苦しみ〉たる語と冠詞の有無に違いをみせるといっても、両者の〈sentir〉の使い方には相違がみられはしないのである。さらに彼女が㊦で〈わたしたちの思惟〉がこの〈喜びや苦しみ〉を〈伴う〉と記すことは、これが〈真理の探求〉における〈思惟〉をさすのではないどころか、彼女が㊦㊧に〈新しいデカルト〉と書くにせよ、〈新しいデカルト〉をして〈日常的用法〉での〈思惟〉たらしめるわけでもないということになる。そこで㊦の〈*notre pensée s'accompagne de plaisir ou peine*〉の〈pensée（思惟）〉が〈新しいデカルト〉を示す〈思惟〉でなければならぬとすれば、これこそ「もう一つの真理の探求」における〈思惟〉なのだと思断じるほかなかるう（この〈思惟〉をはじめ、この用法での〈esprit〉は、また〈感覚〉を含意させる各語は何かについて、具体的に語るは次号以降の分析に譲るが、それぞれの検討によって、〈新しいデカルト〉すなわち「もう一つの真理の探求」がより明らかにされるであろう）。ここでは上記していた〈sensation〉を再度取り上げ、それが「もう一つの真理の探求」の用法がある一証左にもなることを以下に注釈するにとどめる。

それは要するに、シモーヌ・ヴェーユが〈sensation〉を、彼女の時代や今に通用する語としてよりも、〈新しいデカルト〉たる「もう一つの真理の探求」がある証しに、その身体の〈sens〉や〈esprit〉の〈sentiment〉に宛がわれる証し

に用いたということにつきる（ここと次の段落で明らかにしてある）。彼女にあって、〈日常的用法〉を説かんとするは、たとえば〈感覚〉に関してならば、デカルトのいう身体の〈sens〉や〈âme〉の〈sentiment〉の使用を示すだけでこと足りたはずである。これを彼の言にて繰返すと、〈chaleur（熱さ）〉や〈douleur（苦しさ）〉が身体（諸器官）に受け入れられ、そこで身体の〈sens〉（前記した〈ressentir〉とともに次号に譲る）となって、さらに〈âme（腺H）〉に伝わり、〈腺H〉での身体の〈sens〉に、〈理性的精神（脳本体）〉の能力〈sentir〉が〈脳本体〉から出るようにして働きかけるとは、〈腺H（âme）〉の〈熱さ〉や〈苦しみ〉なる各〈sentiment〉（働きかける（運動する））という〈sentir〉がかかわって成るから、筆者はこの〈感覚〉を「能動的 sentiment」と名付けた）を〈腺Hの表面⁽¹⁶⁾〉に〈表象（表出）〉させることであった。だから彼女にあって、〈腺H（âme）〉や〈脳本体（âme raisonnable）〉なる用語に関連させて〈sentiment〉を打ち出す〈日常的用法〉がそのままに、〈esprit〉としての「もう一つの真理の探求」に適用されるとみるかはともかく（というのは彼の引用文の提示によって、この用法の有無がまだ確認されずにいるから。これも次号以降の検討課題にするが、ここでは肯定的立場に立って、以下を続ける）、彼女の方はその〈日常的用法〉での〈sentiment〉を、〈esprit〉の一能力たる〈sensation〉に移し変えることで、「もう一つの真理の探求」にも即応させ得ると捉えたのである（筆者は少なくとも、彼女の場合をそう断じてきたし、彼女にとって、〈sensation〉はまた身体や〈âme〉の〈感覚〉に適應する各能力であるというまでもない）。しかも彼女は学士論文第二部で、一度も〈腺H〉や〈脳本体〉と表記することはなかった。そこで〈sentir〉に関しても、彼女には〈脳本体〉を居場所にする〈sentir〉と語られずに、たんに〈esprit〉の〈sentir〉として、あるいは〈sentir〉を〈運動（量）〉（筆者にすると「〈運動〉中の〈運動〉」すなわち「閾値」）として理解された。

そのうえデカルトにおいて、〈日常的用法〉を要にし、そこに〈真理の探求〉をかさねあわせて一になる「もう一つの真理の探求」は、この名の用法がゆえに、〈精神〉をば〈esprit〉と見定め、彼がその〈感覚〉を問うにあっても、〈日常的用法〉の〈âme〉の〈sentiment〉を〈esprit〉に従わせる〈sentiment〉に見立ておくほかなかった。そこで彼に、〈esprit〉に関与して表記される〈sentiment〉が「もう一つの真理の探求」の〈esprit〉の一能力でなければならぬ証しにさせ

る。これを〈新しいデカルト〉がいることと見抜いたシモーヌ・ヴェーユにとって、それでも「もう一つの真理の探求」における〈esprit〉の〈sentiment〉は、独自さを含ませて捉えられていた。なぜならこの〈sentiment〉は〈sensation〉といい換えられたからである。〈sensation〉を用いたのは、彼女が「もう一つの真理の探求」としての〈esprit〉とその〈sentiment〉を認め立つにしろ、〈esprit〉の〈sentiment〉という表記だけでは、彼が〈esprit〉において、〈日常的用法〉での〈âme（腺H）〉の〈sentiment〉をその「部位（腺H）」を用いて取り入れたのか、また〈sentiment〉自体を〈運動の変化〉や〈運動というものの自体〉⁽¹⁶²⁾の視点をもってみるかを明確にしないことに鑑みて、しかし「部位」によって〈sentiment〉を解きはしない彼女は、だからこれを〈運動〉に焦点を当てさせることで理解しようとした⁽¹⁶³⁾。〈運動〉の観念が重視される背景には、むしろ彼女の認識論の特徴となる〈sensibilité（感受性）〉が打ち出されることがあると察知されようが、それでも「もう一つの真理の探求」にあってさえ、そこでは〈esprit〉に〈表象〉すると語られるにすぎない、彼の〈sentiment〉を、彼女が〈sensation〉と書き入れたのは、これがまたこの〈運動〉にかかわり、かつ〈運動の変化〉である意をきわだたせようとしたためであったし、その〈esprit〉と関係する身体の〈sens〉も〈運動の変化〉と変わらない能力でなければならぬからして、〈sensation〉とのいい換えを可能にさせるからである（身体と関連しよう「もう一つの真理の探求」が〈日常的用法〉での〈âme（腺H）〉を含む身体を織り込んでいるとみるがゆえに、〈日常的用法〉の身体の〈sens〉も〈âme〉の〈sentiment〉も各〈sensation〉に換言されてよい）。しかも〈sensation〉の彼女の語意を取り入れても、それは〈sentiment〉（の範疇）に従っただけであるから、何んら「もう一つの真理の探求」を変貌させることではない。だから彼女からみた〈sensation〉はこの用法に適合させられ、これによってこの用法のことが証されるといえるわけである。

しかしながら、「もう一つの真理の探求」の用法がデカルトに見出されることを証すのは、何も〈esprit〉の〈sensation〉だけではなく、その〈表象〉をもたらず困たる〈sentir〉に対する、シモーヌ・ヴェーユの独特な見方の方にこそ求められるとあらためて指摘せずにおれない。何しろ彼女の〈sentir〉の独特な見方なしに、〈sensation〉へのいい換えが可能になったとも察知されるほどだから、〈sentir〉は、この用法があるという証明にとって、〈sensation〉より、真先に

取り上げられねばならぬ能力といえる。その能力は彼によると、人間に先天的に備わっている〈esprit〉の一能力なのである⁽¹⁶⁴⁾。彼女は〈esprit〉や〈sentir〉をはじめとして、〈esprit〉の〈sentiment〉や身体の〈sens〉に関する彼の用語使用に従うなかで、とくに独特な見方を〈sentir〉に与えたがために、「もう一つの真理の探求」に対しても、〈sentiment〉や〈sens〉の各〈sensation〉へのいい換えを可能にしたと受け取ることができる⁽¹⁶⁵⁾。すなわち独特な見方とは、彼女のいう〈sentir〉は、これが彼において能動的な働きかけたる能力でしかないと捉えられるに比して、その〈sentiment〉の〈表象〉をして〈運動の変化〉をもって〈反射〉せしめる際の、〈運動〉にかかわった「閾値(量)」に見立てられることにあったのである。

なるほどシモーヌ・ヴェーユは〈sentir〉のこうした理解から、一方で〈sentiment〉を〈sensation〉に置き換えたり、それがゆえに、〈感覚〉という能力のあることを無視できなくなったりするにせよ、それでも他方で、身体の〈sens (sensation)〉と同様、〈esprit〉の〈sentiment (sensation)〉も〈何ものでもない〉能力と断じていた。だからこの〈感覚〉(ここでは何より身体の〈sens〉)以外に、彼女が既出引用文⑤で繰返し記す〈外来的な何か〉や〈外来的な事物〉の受容に真に対処すべき能力を用意せずば、筆者のいう彼女独自の認識論すら成り立たないのは当然であろう。そこには〈sensibilité (感受性)〉がなくてはならない。しかもこの〈感受性〉は〈esprit〉で〈表象〉しようそれではなく、〈外来的な何か(事物)〉に即座に対応せねばならぬ能力だからして、身体(諸器官)に受け入れられ、そこで〈表象〉する身体の〈sensibilité (感受性)〉なのである(詳細は身体の〈sens〉とともに、次号以降に譲る)。

筆者はまた、シモーヌ・ヴェーユが上記引用文⑥における語〈対象〉を〈対象〉と記すだけにとどまらず、再々〈外来的な何か〉や〈外来的な事物〉と書くはなぜかを、蛇足になるやもしれぬが、問わずにおれない。思うに、〈外来的な何か(事物)〉も既出引用文⑦の〈わたしたちの生きている世界の事柄〉や同⑥の〈わたしたちは生きものである〉と相即不離に語られているとみることで、〈外来的な何か(事物)〉は、これが人工的な〈何か(事物)〉でないかぎり、〈生きものである〉〈わたしたち〉と同じく、〈生きてい〉なければならぬ〈世界の事柄〉でしかなくなるということである。〈生きている〉証したるは、〈外来的な何か(事物)〉すら〈運動〉することにある。この〈運動〉を含意さ

せる語が筆者には、〈外来的な何か〉や〈外来的な事物〉であると理解される。それだけでなく、〈外来的〉〈世界の事柄〉をさすは彼女が⑤で一度だけ使う〈対象〉の語でこと足りるであろう。そのうえ〈世界の事柄〉をあえて〈生きている〉とする表現で飾ることもなかろう。

むろん〈生きている〉〈外来的な何か(事物)〉に相對する、シモーヌ・ヴェーユをはじめとした〈わたしたち〉も〈運動〉する。その〈運動〉は既出引用文⑤にも触れているごとく、〈わたしたち〉が〈外来的な何か(事物)〉から影響を受けるところに発するし、しかも〈esprit〉より先きに、まずは〈身体(corps)〉が〈運動〉する。なぜなら彼女は、〈わたしたち〉が〈運動〉するとは、〈外来的な何か(事物)〉を内外の身体(諸器官)で受け入れる〈運動〉にはじまり(既出引用文①参照)、そこに働きかける〈運動(ressentir)〉で〈表象〉する、たとえば〈感覚(sensation)〉を、〈esprit〉での〈感覚(sensation)〉へ、さらにはデカルトのいう他の〈思惟(pensée)〉への〈表象〉〈運動〉に伝えるとみなすからである。だが再度いうが、〈外来的な何か(事物)〉はその〈表象〉を各〈感覚〉ばかりによってもたらされるのではなかった。こうした〈運動の変化〉になり得ずに、〈運動というもの自体〉に終始する能力があった。それこそ〈sensibilité(感受性)〉であった。この〈感受性〉には、本稿におもにみた、〈esprit〉で〈表象〉する〈感受性〉と、次号に詳しく語ろう、〈生き(てい)る〉〈生きもの〉たる〈わたしたち〉の身体(諸器官)に〈外来的な何か(事物)〉を受容して、身体で〈表象〉する〈感受性〉とがあった。だから彼女にとって、〈外来的な何か(事物)〉を受容する能力は〈感覚(sensation(彼のいうsensとsentiment))〉だけでなしに、身体と〈esprit〉の二つの〈感受性〉もあることになる。かつそこから彼女が強調することは、〈生きる〉〈生きもの〉たる〈わたしたち〉はもはや〈感覚〉をではない、すなわち〈運動の変化〉ではない〈運動〉なる二つの〈感受性〉を仲立ちにしてこそ、〈外来的な何か(事物)〉という〈生きている世界の事柄〉と真に接触することにある。

〔続〕

以下の註の番号が(143)から続くのは、本稿が前号『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ②〕』の脱稿と同時に書かれたものであるからである。

註

- (143) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕』とくにP.12参照。
- (144) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》P.708 (紀要『なぜ感受性なのか(3)』P.20, 引用文 ㊦㊧) 参照。
- (145) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕』とくにP.32参照。
- (146) アリストテレス全集6『靈魂論』P.51, P.55, 山本光雄訳, 岩波書店, (なおデカルトは〈感覚は質的変化〉と捉えるより, すなわち①〈Qu'est-ce donc que l'on connaissait en ce morceau de cire avec tant de distinction? Certes ce ne peut être rien de tout ce que j'y ai remarqué par l'entremise des sens, puisque toutes les choses qui tombaient sous le goût, ou l'odorat, ou la vue, ou l'attouchement, ou l'ouïe, se trouvent changées, et cependant la même cire demeure. Peut-être était-ce ce que je pense maintenant, ... (蜜蠟においてあれほど判明に理解されていたものは何か。それは確かに, わたしが(身体の)感覚を介して捉えたもののいずれでもなかった。というのは味覚, 嗅覚, 視覚, 触覚, 聴覚のもとに起こっていたものはすべて変化してしまうが, 蜜蠟は存続しているからである)〉より, むしろ上記引用文最後の文章訳である〈おそらく, それはわたしが今思惟しているものだった〉という〈蜜蠟〉たる物体(事物)を〈思惟する〉ことに, すなわち事物の何を理性(知性や悟性)で〈思惟する〉かといえは, ②〈De ce genre de choses est la nature corporelle en général, et son étendue; ensemble la figure des choses étendues, leur quantité ou grandeur, et leur nombre; comme aussi le lieu où elles sont, le temps qui mesure leur durée, et autres semblables (この部類のものは, 物的本性一般, そしてその延長, さらには延長を有する事物のかたち, 事物の量, すなわちその大きさと数, さらには事物が存在する場所, その持続する時間, およびこれに類するものである)〉と語られるからして, これらの〈事物(物体)〉の, すなわち③〈certains modes de la substance (実体のある様態)〉は〈sens〉や〈sentiment〉なる諸〈感覚〉でなしに, 〈pensée (思惟)〉によってしか認識されないとすることに, デカルトは関心を寄せている。だから以上のことは, 彼にとって〈感覚〉が問題にならないことを証左しよう。上記引用文(René DESCARTES 《MÉDITATIONS》①P.280 (SECONDE), ②P.270 (PREMIÈRE, ③P.293 (TROISIÈME)) 参照。
- (147) この学士論文では拙論本文に従うは当然のこと, たとえばあの『哲学講義』には, 〈sens (感官)〉や〈nerf (神経)〉などの身体(corps)や精神(âmeと

esprit) に関する用語が見出されるが、本文に記した〈腺H〉や〈脳本体〉の用語はみつからない。〈腺H〉や〈脳本体〉は彼女が生きた当時、別名で呼ばれていたであろうし、彼女が別名で見当をつけても、〈腺H〉や〈脳本体〉で語られる真意にとどくか疑問であってみれば、彼女はこれらを割愛し、〈esprit〉の諸能力の、各「閾値」たる〈運動（働きかけ）〉によって〈esprit〉をあらわすしかなかったと察知される。あるいは〈esprit〉も〈corps〉も『哲学講義』に従うならば、〈excitation（刺激）〉や〈réflexe（反射）〉にて表現されるように思われる（本文後述）。用語（Anne REYNAUD-GUÉRITHAULT 〈LEÇONS DE PHILOSOPHIE PAR Simone WEIL〉 P.21, P.35, P.40）参照。

- (148) Anne REYNAUD-GUÉRITHAULT 〈LEÇONS DE PHILOSOPHIE PAR Simone WEIL〉 P.21 PLON, 参照。
- (149) Ibid; P.22。
- (150) Ibid; P.17。
- (151) Ibid; P.21。
- (152) 紀要『感受性試論〔I〕』P.2, 註(6)P.28註(6)註欄, 新潟大学教養部研究紀要, 第17集, 1986年(そこには、「哲学から心理学を分離し, 科学として樹立させようとしたのは, ドイツの実験心理学の創始者と目されるヴント(1832-1920年)である」と記しおいた。だがこの影響が当時のフランス哲学界に及んでいたかは定かではない。たとえばシモーヌ・ヴェーユは少なくとも, 本文に述べる通り, 哲学として心理学を語っていると見受けられるのだが) 参照。
- (153) 紀要『感受性試論〔V〕』P.26註(51), P.33註(51)註欄, 新潟大学教養部研究紀要, 第21集, 1990年参照。
- (154) 本文中の「デカルトに訣別を宣言し(見切りをつけ)た」とは, シモーヌ・ヴェーユが学士論文の表題にあるように, デカルトを取り上げたあとの諸作品では, 学士論文の批評ほどに, 彼(の思想)をまとまっては語ることがなくなったことをさす(彼女がそこで彼に賛意を表明するならば, どうして〈感受性〉が書き込まれたりしたのであろうか。〈感受性〉は晩年の作品, たとえば『秘蹟の理論』(1943年)まで彼女に問われ続けているのに)。だから繰返しいうが, 彼の思想(筆者のみる認識論)の批判にとどまらず, 学士論文に盛り込ませるこの〈感受性〉が意味させるのは, このとき〈感受性〉を中核とした彼女独自の認識論が誕生した(いや完成した)ことにある。まただから『哲学講義』では, 学士論文で使用した〈sentir〉以外の語にて, すなわち〈réflexe(反射)〉で〈運動(「閾値」)〉を説く必要があったといえるのである。

ちなみにシモーヌ・ヴェーユが短い生涯中に書き残した、およそ177の諸作品（上記の学士論文や『哲学講義』をはじめとして、ほかの書簡、雑誌論稿、草稿、未定稿やノートを含めたそれぞれを一作品と数える）を、筆者がすでに発表した紀要『シモーヌ・ヴェーユの諸作品における語彙』（新潟大学教養部研究紀要、第19集、1988年）の作図（作品年代順）表に従って見渡せば、デカルトの名前や彼の単発的な思想が記される、いくつかの作品は以下のごときである（作品の表題は原語で付記すると長くなるので、邦題だけにした）。

【数学教育】（『科学について』所有）、P.106, P.107（2回）、P.108参照（頁は原書。以下同様）。

【展望、わたしたちはプロレタリア革命に向かっているか】（『抑圧と自由』所有）、P.15、（『補遺』P.258）。

【哲学講義】P.29, P.31（2回）、P.34, P.48; P.66, P.82, P.88, P.93, P.96, P.105, P.112, P.118, P.123（2回）、P.124（4回）、P.125（2回）、P.126, P.128（4回）、P.133（2回）、P.137, P.138（3回）、P.147, P.148, P.149（2回）、P.170, P.172, P.182, P.188, P.228, P.229, P.231（7回）、P.232（2回）、P.253, P.258（2回）、P.259, P.266, P.269, P.271, P.283（3回）、P.285。

【レーニン著『唯物論と経験批判論』について】（『抑圧と自由』所有）P.48, P.52, P.53。

【自由と社会的抑圧との諸原因についての考察】（『抑圧と自由』所有）P.108, P.139, P.140（2回）。

【工場日記】（『労働の条件』所有）P.70。

【アランの手紙への回答】（『科学について』所有）P.111（2回）、P.112。

【断片】（『労働の条件』所有）P.121, P.122（3回）、P.123。

【ノートⅠ】P.11, P.33, P.34, P.37, P.40, P.65（2回）、P.66（2回）、P.71, P.74, P.78（2回）、P.89, P.101, P.103, P.145, P.233。

【ノートⅡ】P.97, P.131, P.214。

【ノートⅢ】P.62, P.91, P.139, P.169, P.237。

【プラトンにおける神】（『ギリシアの泉』所有）P.129。

【根をもつこと】P.83, P.201, P.205（2回）、P.218。

【量子論についての考察】（『科学について』所有）P.196。

【科学とわたしたち】（『科学について』所有）P.121, P.265（続き）。

以上15作品に、デカルトの名前や彼の思想の一が記される。そのうち『ノートⅠ』は作品年代順（彼女が書いたであろう日時）に添うものであるが、折り

に触れて記すのがノートであるからして、その日時設定は難しく、「ノートⅠ」の記入下に、ⅡとⅢは並べ置かれる。また作品のあとに括弧が付されていない場合、作品自身が単行本である。なお筆者に時間があれば、上記作品群のデカルトについても検討する必要があるだろう。

- (155) なぜなら紀要「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ②〕」の註(135)(新潟大学言語文化研究, 第9号, P.112)で、シモーヌ・ヴェーユは〈外観は感受性によってもたらされる〉と語っていたからである。〈感覚〉もこの〈外観〉より受け入れられた能力となることでは上記引用文と同様である。
- (156) Ibid; 註(120)(註(155)紀要) P.107(そこには学士論文に使用された〈sens〉の語の頻度数がまとめられているし、むしろ〈sens〉自体が身体の〈感覚〉を意味させることに間違いないとしても、〈sens〉が「身体の」と明確に表記されることはない。また「身体(corps)」という語は学士論文中の、第一部のP.23(4回), P.25(5回), P.27(2回), P.31, P.38, P.39(2回), P.40(2回), P.41(3回), P.44, 第二部のP.50, P.56, P.64(2回), P.72(2回), P.78(2回), P.84(3回), P.85(2回), P.86(11回), P.87(5回), P.88(6回), P.89, P.90(2回), P.92(2回), P.95(3回), 結論のP.97(2回)に記される(序論には一度も見出されない)。しかし「身体の〈sensibilité(感受性)〉」という語句は皆無である) 参照。
- (157) Ibid; P.107, 註(125)註欄参照。
- (158) René DESCARTES 《MÉDITATIONS》(TROISIÈME) P.287。
- (159) Ibid; (SIXIÈME) P.326。(ちなみにデカルトの主要作品における〈sentir〉使用頻度は、たえず参照した《ŒUVRES LETTRES》(Gallimard)の頁記入を省略するが、「精神指導の規則」に計3回、「人間論」に計25回、「方法序説」に計4回、「屈折光学」に19回、「省察」に計45回、「哲学の原理」に計47回、「情念論」に計45回となる。)
- (160) Ibid; (SIXIÈME) P.321。
- (161) 紀要「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔V〕」P.P.20-23参照。
- (162) 紀要「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ②〕」P.113引用文①参照。
- (163) 本稿「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ③〕」註(146)註欄参照。
- (164) 紀要「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕」P.P.1-2引用文⑩⑪と⑫(繰返しているが、それら引用文には⑬を除いて先天的にあるという各能力の出所となる〈精神〉が〈âme〉なのか、〈esprit〉なのかの名指しがない。名指しがないことは、デカルトが〈日常的用法〉、〈真理の探求〉と「もう一つの真理の

探求」なる三つの用法を語る以上、〈âme〉や〈esprit〉を三つの用法のそれぞれの〈精神〉に当てはめてよいことを、かつ⑰や⑱に記される各諸能力を三つの用法のどの〈精神〉の諸能力としても使用させ得ることを示唆する)参照。

- (165) デカルトが〈日常的用法〉における〈精神〉に〈âme〉を宛がう場合でも、〈âme〉の〈sentiment〉には、シモーヌ・ヴェーユにとっては本文で記す同じ役割を有する〈sentir〉が用いられるので、身体の〈sens〉に対すると同様に、これらの〈表象〉となった各能力を各〈sensation〉の語で置換させることができる(ただし身体の〈sens〉を〈sens〉として〈表象〉させる際、彼は身体に先天的に備わった身体的能力〈ressentir〉が身体(諸器官)に受容された対象に働きかけるというが、これに関してはここでも次号に譲ると断わるしかない)。